
K

藤田迷路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K

【コード】

N3889C

【作者名】

藤田迷路

【あらすじ】

黒猫は一人の男と出会い、生きる意味を知る。BUMPのインディーズ時代の2ndアルバム『THE | LIVING | DEAD』track6『K』を基に書いた歌詞小説です。

1・H（前書き）

妄想の類ですので見解に大差小差ありましようが、どうか寛大な目で読んでやってください。

急ぐ足。歩く足。立ち止まる足。様々な足が俺の視界の端に映る。今日はやけに足が多いが、俺の前にはどの足もない。道の向こう端まで見渡せそうだ。

この大通りを歩くとき、どいつもこいつも俺を見ては道を譲りやがる。

どうぞお通りくださいってか。そりゃ好都合だ。

俺はこれ見よがしに自慢の鍵尻尾を水平にしながら、並び立つ足の間を闊歩^{かっほ}する。

「疫病神」

「悪魔の使者」

「化け猫」

俺の悪名は数え切れない。皆が俺を避け、忌み嫌う。

まあ、そうだろう。こんな為りの俺に近付きたがる奴なんて、相当な物好きか変わり者くらいだからな。

だが、俺にはそれが心地いい。それが俺の望んでいたそのものだからな。

不意に石が飛んで来て俺の目の前で撥ねた。いつものように罵声と一緒に付いてくる。

またか……。やれやれご苦労なことだ。もう何度同じ光景を見たことか。わざわざ俺に構うなんて暇な人間もいるもんだ。

自分に関わろうとする全てが煩^{わづ}わしい。それなら無視してくれただろうがよっぽどいい。だから俺は嫌われ、避けられていると知りながらも、こうして大通りを歩くのかもな。

一個の石をきっかけに、石と罵声はその数を増していく。

俺は最低限の動きでそれらを躲^{かわ}すと、面倒くさいとばかりに闇に身体を溶かした。

自分が孤独だと自覚したことはない。そもそも俺にとってはこれが当たり前だ。

この街に流れ着いた頃、他の猫たちが興味を示して近付いて来たこともあったが、程度の低さに嫌気がさし、俺はいつものように独りを選んだ。

それは俺にとっては自然な選択だった。

それ以来、街の猫たちはおろか、人間さえも俺に近付かなくなつた。

俺はそれを楽しんですらいた。皆が自分から離れて行けば行く程、自分の縄張りが大きくなるような感覚がしていた。

月明かりを避け、公園の植え込みで俺は眠りに就いた。こうしてると誰にも見つからないもんだ。

冷えて来た夜風に身をさらに丸くしたとき、不意に地面が離れ身体が浮き上がったかと思うと、ふわりと温かくなった。俺は突然のことに自分の身に何が起きたかは解らずにいた。

「こんばんわ。おチビさん。君はとても素敵な黒い毛をしているね」
首を回すと、すぐ傍に男の顔があった。絵の具で汚れた服。ぼさぼさの頭と白いヒゲがうざったい。

俺は自分がその男の腕の中にいることに気付くと、すぐに男を睨んだ。牙を見せ、爪を光らせ威嚇した。
だが、どうだろう。男は気にも留めていないどころか、平然と笑みさえ浮かべやがった。

「お前もそうなのか…。私たちはよく似ているみたいだな」
何を言っている？ お前と俺が似てる？ ふざけるな。

俺は男の腕の中で手足をばたつかせ、男の腕、顔、身体、届く範囲のもの全てを引つ掻いた。男が痛みにも腕を僅かに緩めた瞬間、俺は男の胸を蹴って飛び退き、再度威嚇した。

ざまあみる。さあ、憎め。忌み嫌え。
だが、男は静かな笑みを浮かべたまま、俺のほうに手を伸ばしている。頬の爪痕が赤いのに。

俺は思わず後ずさった。どんな猫の威嚇にも、野良犬や石やビン、どんな罵声や威嚇にも怖れたことはなかった俺が怖じ気づいている？

いや、違う。何だ？この感覚は。

胸の中がむず痒くなってきた、俺は無様にも逃げ出した。

ウソだ。有り得ない。俺は疫病神だぞ。悪魔の使者だぞ。

電柱の陰、建物の隙間、車の下。俺は、まだ身体に残る男の腕の温もりを引き剥がすように闇に身を溶かすが、男はどこまでも追って来ては難無く俺を捜し当て、俺の縄張りにいとも簡単に入り果せた。

何なんだよ。こいつは！

逃げるのにも嫌気がさしたし、別に根負けしたわけじゃないが、俺はこいつの家に住み着いてやることにした。汚い家で隙間風もひどいが、これから来る季節を越すくらいの耐久性はありそうだし、利用させてもらうさ。

俺は日がな薪ストーブの前に陣取り、あいつが呼んでも見向きもしなかった。

ホーリーナイト

それが俺の名前らしい。“黒き幸”なんて大それた名前だな。

奴は少し離れたところで、時折こっちに目を遣りながらキャンバスに向かつてせつせと何かしている。俺は奴を横目で一瞥すると、わざと尻尾を左右に揺らしてやつたりした。

何してんだかな。俺は興味がなさすぎて欠伸あくびが出た。

そんなある日、奴が近寄って来て完成した絵を見せた。そこには艶やかな黒で描かれた俺がいた。

な、なんだ俺を描いていたのか。

…ま、三食飯付きだ。俺に迷惑かけなきゃそれくらい許してやるか。

「お前と私はすっかり友達だな」

暑さが和らぎ始めた頃に、奴からそんな言葉を聞いた。数ある悪名の響きには何も感じなかったが、この“友達”と言う響きには何か違うものを感じた。

俺も次第に奴を意識し始めた。と言うよりは構ってやるといった

ほうがいいな。

寝てる足を引つ掻いたり、出掛けてる間に部屋をめちやくちやにしたり、ベッドに潜って邪魔してやったり。

雪景色を越え花が咲き出す頃になると、奴と行動を共にすることも多くなった。

奴が街角で絵を売ると言えばついて行き、傍らで丸くなった。

奴が食事すると言えば隣で食べ、奴の皿をめちやくちやにしてやった。

奴が寝ると言えば毛布を引つ張って、俺だけの物にしてやった。

そのどれもが俺には楽しくて仕方なかった。

いつ以来だろう。こんな気持ちになったのは。“友達”とはこういうことなのか。

まあ、悪くないじゃないか。

庭一面が雪で満たされた頃。いつものように部屋で奴のモデルをしてやってると、突然ばたんと音を立てて奴が椅子から崩れ落ちた。何だ？

俺は訝りながら近づくと、奴の呼吸が弱々しくも荒い。俺は直感した。それは死期だった。

死体なんていくつも見たし、自分の死すら怖いと思ったことはない。だが今、目の前に迫った恐怖に足がすくんでいる。

おい…、ウソだろ。

俺は奴の顔を懸命に舐めると、奴は掠れた声で「心配いらぬよ」と向けた微笑みを見て、胸を安堵が駆け抜けた。

奴は覚束ない足で立ち上るとおもむるに机に向かい、震える手で手紙を書き始めた。書いては休み、書いては休み、男はやつとのこと一枚の手紙を書き上げて俺に差し出した。

「なあ、お前に頼みがあるんだ。これを届けて欲しいんだ」

それは奴がした、初めての頼み事だった。

それから奴は独り言のようにゆっくりと話し始めた。

「昔の私は常に誰かと距離を取り、壁を作って人を拒絶していた。近づく人を傷付けました。そんな私の黒だけで描かれているような絵を彼女は好きと言ってくれてね。以来、絵は私の夢になったんだ。小さい町だか賞ももらってね。皮肉にもそれは大切な人と故郷に別れを告げることになってしまったがね。今、彼女はどうしているだろうか…。良い人と出会い、良い人生を送っていてくれると祈りたい…」

奴の呼吸は浅く、喉にはたくさんの皺を作っていた。

あれ…こんなに痩せていたっけ…。

「彼女はこの手紙を迷惑に感じるだろうか。迷惑だろうな…。だが、願わくば受け取って欲しい。今でも待っていて欲しい。…なあ、ホーリーナイト。これを彼女に届けてくれ…お願いだ」

やがて奴は早い夜を迎えたように、静かに横になった。俺はいつもの習慣で毛布をかけてやった。

いつまでも起きない奴に俺はどうしていいかわからず、焦点も曖昧なまま辺りを見回すと、いつの間にか奴の部屋には画材道具と簡単な家具しかないことに気が付いた。黒い絵の具の空チューブだけがあちらこちらに転がっている。

そういえば、こうしてこの部屋をまじまじと見るのは初めてだな。窓の傍には恐らく奴の故郷の風景か。タンポポの咲く丘に佇むたたず女の子を描いた絵が何枚か飾られていた。青いスカートが目を引く。俺は記憶するでも忘れるでもなく、何気なく奴がいつも大事そうにしていたスケッチブックをめくった。俺がいた。後ろ姿の俺。横顔の俺、背伸びする俺、一枚を除いて全てに俺がいた。

つたく、悪魔の使者と呼ばれた俺の絵ばかり描いてつから、全然売れないんだよ。

実際、俺は奴の絵が売れているところを見た事がなかった。

瞬間、身体の芯を何かが駆け抜け、心臓に突き当たった。

ま…まさか…。

俺の奴との記憶の点が紡がれ出し、今ひとつの線となって奴の死に結びついた。

俺の絵だから売れなかった…

俺がいたから皆が寄り付かなかった…

俺が奴の食事の邪魔をした…

俺が来たから奴は二人分の食事を…

俺さえいなければ奴は死なずに済んだんだ…

俺が…俺が奴を殺したんだ…

自己嫌悪は涙となって溢れ出した。

俺は奴の身体に寄り添って見たが、いつも布団に招き入れる大きな腕は俺の身体を包まなかった。

謝りたい。届かなくてもいいから謝りたい。

声を挙げて奴を呼んだ。名前なんて知らなかったが声の限り奴を呼んだ。

何度も触れて、何度も舐めて、何度も引つ掻いて、何度も噛んだ。でも奴に温もりは戻らなかった。痛みを歪めることもなかった。

大好きな微笑みも、二度と俺に向けられることはなかった。

俺は自分を責めた。自分の感情を御し切れずに閑散とした部屋を暴れ回ったが、疲れが余計に嫌悪感を重くした。

初めて手にした温もりは静かに、それもいとも簡単に滑り落ちた。悪魔の使者と呼ばれた俺が温もりを欲した報いがこれかよ。俺はただ初めての友達といるのが嬉しくて…。

もう、いいや…。疲れたよ…。もう何も失いたくはない。

あと何回眠れば奴に会えるだろうか。そう思いながら、俺は奴の傍で眠ることにした。

再び奴の毛布に忍び込み、今もうつすらと残る頬の傷跡をそっと舐める。

あの時はすまなかった。

俺は怖かったんだ。温もりに触れたいと望みながら、その温もりを失うことを。だから近付く者を傷つけることで自分を守っていたんだ。俺も同じだったんだ。

それをお前は「似た者同士」と言って名前を呼んでくれた。こんな気持ちにさせてくれたのはお前だったんだ。

恩返しどころか、恩を仇で返してしまうなんて。本当にすまなかった。

俺は奴の傷を癒そうと、もう一度奴の頬を舐めようとして舌を止めた。

……待て。そうだ…。まだだ！

俺の中で何かが沸き立つ。

奴が俺にした唯一の頼み事。俺にはやらなきゃならないことがある。

全てのことを拒絶し、塞がりかけた目の前が開けけるひらのを感じる。

と俺は毛布を飛び出し、奴の最期の手紙をしつかりとくわえた。

わかった。お前の願いは確かに受け取った。任せてくれ。約束は必ず守ってみせる。

窓を見ると外は既に暗くなり、雪が窓を叩いていた。これから外に出ようなんて者はいないだろう。

だが、一刻も早くこの手紙を届ける。俺はこれを届けなきゃならないんだ。

俺はもう一度だけ奴の身体に寄り添い頬を擦り寄せると、ドアを押し開けた。

空にはこれから来るであろう深い闇と強い寒さが渦巻いているのが見えた。

外は雪が降り、強い風がヒゲを揺らす。俺に孤独をもたらしてくれる存在だった夜は今、俺の命さえ奪おうとしている。闇が足に絡まり思うように走れない。

それでもこの約束は何があっても放しはしない。俺は二度と滑り落ちることのないように手紙をくわえた口にさらに力を込め、がむしゃらに走った。

山では雪が足の感覚を奪い、谷では風が毛を凍りつかせ、眠気が視界を遮ろうとする。

通り過ぎる街ではいつものように石と罵声が雪よりも激しく降りつけ、もつれ倒れる俺の左目と後ろ足に石が当る。

俺が石に当たるなんて、ついに焼きが回ったなあ。

そう自嘲したところで罵声も雪も止みはしない。何より、そんなものに俺の意志は阻ませやしない。肩、背中、頭、腹。次々に石が感覚の薄れた身体を傷付け、鈍い痛みと滲む血が冷え切った身体を少しだけ温めた。

「悪魔の使者だ！」

「疫病神め！」

「魔法の使い魔め！」

違う！俺はホーリーナイトだ。

名前なんて呼ばれたことはなかった俺に奴がくれた大切な名前。どれだけ汚く罵ろうと、俺には奴がくれたこの名前がこの胸に刻まれている。

忌み嫌われ、蔑あはまれた俺にお前は安らぎをくれた。温もりをくれた。名前を呼んで、俺の存在がそこにあることを教えてくれた。

生まれて来た理由、生きる意味なんてわからない。だが、ひとつだけ確かなことは、俺は今ここで、この日のため生きているという
真実。

お前と出会え、俺は生きていく意味と出会えた。俺はお前のために生きる^と決めたよ。もう何があっても迷うことはない。

どこまでだって走ってやる。足が千切れようとも、この目が視力をなくそうとも、俺は命に替えてもこの手紙を届ける。

それが今の俺の生きる意味だから。

痛み、寒さ、疲れ、眠気はひとつの重荷となって俺の足にのしかかり、今にでも崩れ落ちそうだ。

だが、足を止めれば全てが終わる。俺はただひたすらに駆け抜けた。

二つの山と一つの谷と三つの街を抜けた頃、張り詰めるような鋭い空気を暖める朝日が丘の向こうの雲間から顔を出した。奴の部屋で見た女の子が佇んでいたあの絵のタンポポの咲く丘。奴の故郷に辿り着いた。俺にはわかった。

既に足の感覚は完全になくなり、ただ俺の身体を支えている物にしか感じられずに、もつれた感覚もないまま何度も転んだ。

左目も視界のほとんどを失い、右目も霞み出した。意識も何度飛んだかわからないが、その都度、石と罵声もしくは寒さが俺の身体をたたき起こした。

身体中の傷から出た赤い血は凍りつき、奴が素敵と言ってくれた自慢の黒い毛を疎まばらに逆立たせている。その姿は“悪魔の使者”の異名に拍車をかけ、罵声と石が前に立ち塞がり行く手を阻む。

「悪魔の使者よ！」

「帰れ！ この化け猫が！」

「何しに来やがった！ 死に神が！」

ここでも散々な言われようだな。確かに今ならその名前に相応しいかも知れない。だが、俺はホーリーナイト。この手紙を届ける聖なる使者だ。

俺は名前がこんなにも力と勇気を与えるものとは思ってもいなかった。名前は自分が自分である証なんだ。

俺は奴と出会うまで名前がなかったことを心から後悔した。呼ば

れるだけで心に触れられたように温かくなり、優しさが滲み出す。
今では俺の大切な物になったこの名前を誰にも汚けさせはしない。

動かない足が何だ。走れなくなっても、この歩みだけは誰にも止めさせない。

俺は石と罵声を投げる奴らに、とくと見やがれと言わんばかりに、
鍵尻尾を水平に威風堂々と歩いてやった。

温まり出した空気の中、道を転がるように目的の家を捜していた。実際、その家は知らなかった。

不意に、村の通り向こうの陽光に照らされた赤い屋根の家が、僅かに残る視力に強烈に飛び込んで来た。

確信などなかった。だが、俺は惹き付けられるように力の入らない足を引きずりながらも力の限りに駆け出した。何度も転んで泥だらけになりながらも歩み寄ると、宛名と標札が一致した。

見つけた…。この家だ。

俺は勇んでドアを叩こうとするが、まるで力が入らない。引っ掻こうにも爪なんかとうに失っていた。撫でるようにドアを叩いても一向に反応はない。

ああ…。ここまで来てダメなのか。

俺はもう動けなかった。絶望が砕けかける身体をさらに押し潰す。もはや全身がただの器になるように自分の神経を離れていき、意識が飛んでいこうとするのが自分でもわかる。きつともう戻って来ないことも。

消えかける意識の中、不意にドアが開いたのがわかった。何故開いたかはわからなかったが、そこに立つ老婆に奴の部屋で見た青いスカートの子の女の子の面影が朧げに見て取れた。

間違いない。この人だ。

老婆は虚空を見つめて辺りを窺った後、小首を傾げた。

「…そんなわけないわよね。やっぱり気のせいね」

待て、待ってくれ。

俺は懸命に首を伸ばし手紙を差し出すが、身体が動かず気付いてもらえない。俺は二度と放すまいと誓った手紙を一度だけ放すと、

渾身の力で鳴いた。声は出ただろうか。

「あら？ まあまあ、おチビちゃん。こんなに汚れて一体どうしたのかしら。」

老婆は俺の抱き上げた。老婆の腕は、奴のものとは似ても似つかないほど華奢だったが、奴と同じくらい温かいのが感覚のない身体にもわかった。

それ以降の記憶はない。

小さな部屋でさっきの老婆が汚い猫の身体をお湯で洗っていた。真つ白なタオルで猫を拭き終わると、キレイな黒い毛が現れるのを俺は傍らで見ていた。

ああ…、あれは俺か。そうか…、俺は死んだのか。気付くと身体が浮くように軽かった。

ふと気配がして横を見上げると、奴がいた。驚きや嬉しさよりも、今までいなかったことが不自然だという感覚で、安心した。

老婆も奴の気配に気付いたのか視線を向けたが、老婆には見えてはいないだろう。でも、「やっぱり貴方でしたか…」と言うと老婆も涙と微笑みでそれに応えた。

奴は微笑みを保ったまま、俺に向き直る。俺の大好きなあの微笑みだ。

「行こうか、ホーリーナイト」

もう、いいのか？

「ああ、お前のお蔭でもう一度彼女に会うことが出来たんだ。礼を言わねばな」

お礼なんて…。俺は…俺はアンタを…

「そんなことはいいんだよ」

でも…、俺がアンタにもらったものに比べたら、まだ何も返せてない。

「そうか…。じゃあ、また一緒に歩いてくれるかい？」

…そんなことでいいのか？ もっと…

「それがいいんだ。私がそうして欲しいんだ」

……わかった。お前と俺は似たもの同士だからな。俺がいなきや何も出来ないんだな。

「ハハハ、そうだな」

なあ。

「何だい？」

………ありがとう。

「いちちらこそ」

その声が温かかった。俺はまた奴の前を歩いている。少し遅い歩調に合わせながら、鍵尻尾を水平に。

手紙に添えられた絵には、星空の下、タンポポの咲き誇る丘で俺とじゃれる一人の少女の姿が描かれていた。

タイトルは『HOLY NIGHT』。

それを見て笑顔を浮かべた老婆はタイトルにアルファベットひとつ付け加えると、俺を“ホーリーナイト聖なる騎士”と呼んでくれた。

<
J
>

10・T (後書き)

ご精読ありがとうございます。

いやはや、話が長くなりすぎて猛省です。

もっと簡潔に端的な言葉で表現する術を身につけなきゃと思います。

因みにタイトルの意味が分からない人は、サブタイトルの空いてるところにメインタイトルを当て嵌めてみてください。からくりはそこに隠されていますから。

人によって曲の捉え方は様々あります。

ですが、この小説がアナタの描く『K』と同じであれば嬉しいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3889c/>

K

2010年10月10日03時15分発行